

E の探偵/ 俺にとってのヒーロー

五十歩百歩

2023 年 2 月 19 日

「先生、起きてください。」

ふわりと舞う粉雪が彩愛さんの幻影を貫き、頬にそっと触れる。溶けた雪はまるで目じりからこぼれたように地面へ流れていく。辺り一面は真っ白。目の前には天使。声も視界もかすれて何も分からないけど、彩愛さんがここにいることは分かる。

「起きてください、お願いですから。私はここにいますから。今日だけは隣に居ますから。先生が死んだら話すらできないんですよ。ねえ。」

このまま眠ってしまえば、彩愛さんの隣にいられるのかな。

「誰か！誰かいらないんですか！死にそうな人がいるんです！ねえ！誰か... お願い...。もう置いていかないで...。」

ようやく叶うんだ、俺の幸せが。

「何ぼさっと寝っ転がってんだよ。翔兄。」

「あげ... は？」

黒い帽子を被った探偵が俺の目の前に現れた。

「ようやく見つけた。こんな遠くまで走らせやがって、全く。」

視界のブレが治まるまで目を凝らす。ロクな防寒着もつけず、しもやけで真っ赤になった手をこちらに伸ばしていた。

「どうして、揚羽がここに。」

「どうしても何も、迎えに来たんだよ。病院を飛び出したって聞いたときは心臓止まったかと思ったんだよ。」

膨れっ面で俺の手を掴む。火傷しそうなほど熱い。

「冷たっ?! 翔兄死んじゃうって!」

どうやら俺が死人のように冷たすぎるようだ。いや、死人同然だろう。

「悪いが揚羽、俺はもう帰れない。探偵の半翔太は死んだんだ。」

「はあ? まだそんなこと言ってるの?」

呆れた顔でため息をつかれる。

「俺にとって探偵ってのは翔兄のことなの。探偵として死んだとか知らないっての！探偵続けろよ。俺に全部任せて勝手にどっか行くんじゃないよ！！！」

鬼の形相で胸ぐらをつかまれる。本気で怒った揚羽を初めて見た。

「俺にとってさ、翔兄はヒーローなんだよ。姉さんの生きてる証を見つけてくれた。1年間ずっと悩んで、進む道を決め切れない俺を導いてくれた。探偵の弟子にしてもらって困ってる人を助けられる仕事の手伝いできた。生きる希望をくれたんだよ。」

胸元を揺さぶられる。ぐしゃぐしゃになった顔で思いの丈を吐き出す揚羽は、探偵らしくない、ただ帽子を被っただけの青年だった。

「俺は何も与えてない。道を決めたのも、歩むことを決めたのも全部お前だ。揚羽からの依頼を解決したわけでもなければ、師匠としてできたことも少ない。いつでも冷静沈着になって教えたつもりではあるけどな。」

「誰のせいでこんなに泣いてると思ってんだよ。バカ兄。」

くしゃっとした笑顔になる。お前はそっちの方が似合う。涙なんてらしくない。

「だからさ、帰ってきてよ。翔兄と一緒に探偵の仕事がしたいよ。俺一人じゃ無理だよ。それともまだ帰れないとか言うの？」

「帰れないさ。帰ったとしても、探偵を続ける資格はない。人としての一線を越えて、非難される決断をしたんだ。探偵は続けられない。」

人を喰らい人としての道を踏み外した。無理矢理彩愛さんを隣に居させて泣かせるようなことをした。強欲な罪人は探偵という職についてはいけない。

「だからなんだよ。間違いがあったなら直せばいいだけでしょ。探偵人生を終わらせることはないでしょ。翔兄が罪を犯した人を全員生かして捕まえたのは、生きて罪を償わせるためじゃないのかよ。」

「... そうだ。それでも...。」

「まだ自分のことを許せない？」

コクリと頷く。何もかもバレバレだ。

「そっか。じゃあ今日だけ。今日一日だけ。探偵になってやるよ。俺が翔兄を導いてあげる。」

帽子を深く被り、少し顴を上げる。左手を指を鳴らし、どこかカッコつけた様子で問いかけられた。

「さあ、お前の罪を数えろ。翔兄。」

「人を愛することが、罪だとでも？」

「えっと... 多分、愛すること自体は罪じゃないと思う。間違ってたのは愛し方だよ。愛するような人や、周囲の人を傷つけるような愛し方じゃ、愛も伝わらないし、自分も周りも傷つくだけだよ。」

「100点の解答だ。成長したな、揚羽。」

俺が彩愛さんをとことん傷つけて、とことん一緒に話し合って、ようやく得た結論に彼はすんなりと

到達していた。

「だけど、それで翔兄が満たされるのか、幸せなのかってのはさ、多分違うと思うんだ。」

「... 話してみろ。」

「翔兄が思う一番の幸せってさ、助手の彩愛さんと一緒に居られることなんだよね。ごめん。手紙見ちゃったんだ。それでさ、普通の愛し方をしている限りは彩愛さんと一緒に居るなんてことはできなくて、一番の幸せを享受することも難しい。だから翔兄はさ、彩愛さんと呼んだんだじゃないの？」

思わず目を見開く。そこまで分かっていたのか。

「えっと、初めまして彩愛さん。弟子の天星揚羽って言います。俺からは姿も声も聞こえないけど、きっと居るんですよね。そこに。」

「あ、はい。どうも下野彩愛です。先生がお世話になっております。」

彩愛さんも驚いている。それはそうだろう。幽霊の存在を見抜いたようなものだ。そんなことができた奴なんて今まで... 一人しかいなかったのに。凄い観察眼と推理力だと感心してしまう。

「翔兄が探偵を続けられない理由にさ、彩愛さんと別れてしまうからってのもあると思うんだよね。せっかく大切な人が隣に居るのに、再び離れ離れになるなんて、相当きついはずだよ。」

俺は頭でしか理解できないけどね、と自嘲気味に揚羽は言う。彼は会うどころか存在すら思い出せなかったはずだ。愛する人のいない虚しさは、人一倍知っているだろう。

「だからさ、考えたんだよね。ここに来るまでの電車の中で。どうすれば翔兄を幸せにして、探偵も続けてくれるのかって。俺は彩愛さんの代替にしかねないからさ。よくて二番目だからさ。俺が翔兄にできることをずっと考えた。そして分かったんだ。」

こうすればよかったんだと、揚羽は背中からレイピアを取り出す。何をする気だ？

「うおおおおおッ！」

大声をあげて、揚羽は自らの左手にレイピアを突き刺した。

真っ白なキャンバスが赤い絵の具に染まっていく。引き抜いたレイピアから命の雫が呆けた俺の顔に飛び散る。思わず舐めたその甘露は、心の砂漠を潤していく。

「いっでえ... くっそ... ほら、飲んでよ翔兄。」

左手が眼前に差し出される。何でこんなことをしたんだ。早く手当てをしないと。頭ではそう理解していても、飢えた体は血を求める。溢れ出る血をヒルのように吸ってしまう。

「彩愛さんの隣にいるには血が必要なんでしょ？だから俺が翔兄にあげるよ。俺が彩愛さんの熱源になるよ。これなら、三人で一緒に居られるよね？」

違う、それは駄目なんだ。それじゃあ幸せになれないんだ。

肉も血も飲み干したい気持ちを抑え、左手から口を離す。

「それだけは駄目だ。俺は俺の幸せのために他人の犠牲を出したくない。これだけは譲っちゃ駄目なんだよ。俺が俺であるためにも。これ以上罪を重ねないためにも。」

ハンカチを取り出し揚羽の左手に巻き付ける。気休め程度だがないよりはましだろう。

「ごめんな揚羽。お前のこと蔑ろにしてた。探偵の素質があるとはいえ、まだ弟子になったばかりだもんな。弟子をほっぽってどっか行っちゃもうなんて探偵失格だよな。」

華奢な体を抱きしめる。折れないように、それでも強く、ぎゅっと。

「しょう... にい。翔兄！」

泣きながら抱き返される。揚羽の暖かい心が体温越しに染みわたる。

「探偵失格だけどさ。続けるよ、探偵を。お前が俺の罪を数えてくれたからな。」

それに、探偵であってくれと二人に願われたから。

隣を見れば安らかな顔。気づけば雪も止んでいた。

救急車のサイレンの音が鳴り響く。二人仲良く病院送りだ。

「日が昇るまでまだ時間はあるさうだけど、お別れの時間だ。彩愛さん。今日は楽しかったよ。そして無理やり連れまわしてすまない。」

「いえ、こちらこそ。楽しい1日を過ごせましたよ。先生。」

「そう言ってもらえて何よりだよ。」

揚羽から帽子を受け取る。これを被れば、まだ帽子の似合わぬ半人前から、弟子を持つようになった探偵に戻る。そうすれば俺はもう彩愛さんの姿を捉えることはできないだろう。

「また来年の6月に会いに行きます。だから、ずっと見守っててください。彩愛さん。」

「はい、ずっと見てますよ。先生。」

帽子を深く被る。帽子は男の目つきの冷たさと優しさを隠すものだ。

「翔兄、泣いてるの？」

「いや、全部雪のせいさ。」

その後、俺たちは一緒に病室叩き込まれ、約3週間程度の安静を命じられた。体感そこまで不健康になった覚えはなく、揚羽も救急車に乗っているときに「サイレンでうるさい冬って、これこそサイレントナイトってこと？」なんて寒いギャグをこぼしていた。クリスマスにはまだ早いだろと突っ込んだが、退院のころは本当にクリスマスになりそうだ。

話を戻して、俺たちの体は見た目以上にダメージがあるらしく、絶対安静とのこと。特に俺は。もう少ししのところで死んでいてもおかしくなかったとのこと。揚羽の助けが無ければ、本当に死んでいたのだろう。つくづく優秀な弟子だ。

そういえば揚羽から残業手当としてクリスマスプレゼントをねだられた。もうプレゼントを貰う年じゃあないだろうに。それでも功労者に何も渡さないというのは良くないが... まあ当日考えればいいことか。

何はともあれ、こうして俺の誕生日旅行は探偵「半翔太」が死んで生き返ったことで幕を閉じた。きっと俺はこれからも探偵を続けていくだろう。依頼人の涙の拭うまでは、弟子が慕い続けてくれる限りは、助手が見守ってくれる限りは、ずっと。

未解決 解決済み